

ISBN978-4-561-66256-3

C3063 ¥3545E

定価 本体3,545円(税別)

白桃書房



Riim

デザイン・ファッションから農業・食文化まで **イタリア流テリトリー力の底力** La forza del Territorio

木村純子  
陣内秀信  
[編著]

白桃書房

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター叢書 30

木村純子・陣内秀信 編著



# イタリア流 テリトリー力の底力

デザイン・ファッションから農業・食文化まで



**La forza del Territorio:  
dal design e dalla moda all'agricoltura  
e alla cultura gastronomica**

|                                               |     |
|-----------------------------------------------|-----|
| 7. 法定都市計画によるひとつの地域資源としてのテリトリーオの<br>確立（1990年～） | 193 |
| 8. 人と都市計画を結ぶ文化的景観                             | 195 |
| 9. おわりに                                       | 198 |

## 第8章 テリトリーオ食料システムの誕生 203

### —1968年と77年におけるイタリア新左翼運動の転換から

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 1. はじめに           | 203 |
| 2. テリトリーオとは何か     | 204 |
| 3. バイオリージョンの両義性   | 207 |
| 4. 鉛の時代に蒔かれたタネ    | 213 |
| 5. テリトリーオと国際市場の間で | 220 |
| 6. おわりに           | 225 |

## 第9章 食産業で形成されるテリトリーオ 229

### —プロシュット・ディ・パルマ, パルミジャーノ・レッ   ジャーノ, 濃縮トマトを事例として

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 1. はじめに                     | 229 |
| 2. プロシュット・ディ・パルマから成るテリトリーオ  | 230 |
| 3. パルミジャーノ・レッジャーノから成るテリトリーオ | 238 |
| 4. 濃縮トマト産業から成るテリトリーオ        | 245 |
| 5. おわりに                     | 254 |

## 第10章 ナポリのテリトリーオ 257

### —街のアイデンティティを支える食文化

|                |     |
|----------------|-----|
| 1. テリトリーオの定義   | 257 |
| 2. テリトリーオと類似概念 | 259 |

|                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| 3. テリトリーオ研究, あるいはテリトリーオに関する<br>議論 | 262 |
| 4. ナポリのテリトリーオ                     | 263 |
| 5. ナポリの食, あるいはナポリのフーズスケープ         | 266 |
| 6. 食はナポリ人のアイデンティティ                | 269 |
| 7. 料理の原材料とテリトリーオ                  | 270 |
| 8. ナポリの食習慣とフーズスケープ                | 272 |

## 第11章 トスカーナ州の営農方法からみた テリトリーオの類型化と その再生メカニズム 275

|                                            |     |
|--------------------------------------------|-----|
| 1. はじめに                                    | 275 |
| 2. キアンティ・クラシコのテリトリーオ                       | 279 |
| 3. モンテプルチャーノのテリトリーオ                        | 286 |
| 4. オルチャ渓谷のテリトリーオ                           | 290 |
| 5. モンタルチャーノのテリトリーオ                         | 296 |
| 6. ピティリアーノのテリトリーオ                          | 300 |
| 7. おわりに: 5つのテリトリーオの再生と歴史を活かした<br>多様なマネジメント | 304 |

## 第12章 地域への誇りと愛着が創る 持続可能な地域社会 309

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 1. はじめに           | 309 |
| 2. 調査概要           | 312 |
| 3. 住民が創る持続可能な地域社会 | 314 |
| 4. おわりに           | 331 |

## 終章 イタリア流テリトリーオの底力 335

|             |     |
|-------------|-----|
| 1. 本書の目的と意義 | 335 |
|-------------|-----|



## 10. 哲学的で詩的に表現するしかないランゲ

上記の研修を一緒に企画・実施したのが、「絶えず上書きされる「弱い近代性」」を書いてくれたピアモンティだ。パエサッジョを目に見えるものとしてだけではなく、意味の認知の対象として捉えられている点を強調している。

彼はデザイン学者のアンドレア・ブランジの弱い近代性という概念を引用しているが、このブランジの言葉を私が初めてピアモンティから聞いたのはランゲではない。数年前に2人で京都府にある丹後半島を旅している時だった。丹後ちりめんで知られる繊維の産地だが、かの地には欧州には既に博物館でしか見ない機織り機が、外観からは普通の住宅としか見えない空間でそこかしこで稼働している。

それらのシーンを2人で眺めながら、私が「産業革命というと大きな動力源を使った第二次産業革命のイメージが強いが、繊維産業が大きく変わった第一次産業革命に、今、我々がみるべきモデルがあるのかも」と話すと、彼が「ブランジは、それを弱い近代性と表現した」と話してくれた。

ここでいう「弱い」はネガティブではない。威圧的でなく、しなやかで多義性に富むという意味だ。硬いよりも柔らかく、固定的であるよりも流動的である。言ってみれば穏やかだ。科学的合理性や大量の機械生産を100%肯定する強い近代性とは異なるものとして、弱い近代性と表現している。その時、私はそう受け取った。モダニティを現代性としても良いが、第一次産業革命からの3世紀を視野に入れるなら近代性が適当だろう。

そして、その彼が、ランゲにはリアリティをもってその種の近代性——現代の多くの人々が興奮か幻滅している近代性とは異なる姿の近代性——があると指摘している。哲学的で詩的に表現している。なにも気取っているのではない。テリトリーオの真髄を伝えるには、このような言葉の数々を使うしかないのだ。彼は「ランゲは、その物語に耳を傾ける人々に、静かに、しかし揺るぎない決意で教訓を与え続けている。最も興味深い未来は、どのように、そして何を本当に探すべきかを知っている人々にのみ明らかになる」と述べているが、まさしく、である。

### プロセスと意味の絶え間ない変革：

#### アレックスサンドロ・ピアモンティによるエッセー

##### 1 絶えず上書きされる「弱い近代性」

現実と知覚の間に生じる空間の中で、私たちは喜びや苦しみに直面しながら生きている。たとえ意識せずとも、である。

今やランゲという名前は国際的なブランドイメージをもつ。ブドウ畑が広がる丘陵地、高級ワインの並ぶセラー、希少な白トリュフ、誰もが魅力的な光景を思い浮かべるだろう。しかし、その華やかさは、何世紀にもわたる人々の忍耐強い営みと知恵が積み重なった結果に過ぎない。

ランゲは単なる地理的な場所ではない。何層にもわたって様々な人々が上書きを重ねてきた古い羊皮紙のように、複雑で豊かで、生産的な物語をもつテリトリーオだ。それは地図の次元をはるかに超えている。広大な畑は一体となって呼吸し、季節の移ろいとともにもその色や姿を変える。まるで、ダイナミックに脈打つ巨大な生命体のようだ。

私がここで語るのは、過ぎ去った時代を懐かしむ感傷的な詩ではない。絵葉書にあるような理想の田舎を称賛するものでもない。目指すのは、果てしなく続く緩やかな丘の中で、世間が喧伝するのとは異なる顔をもつ近代性や現代性の糸を解き明かすことだ。その鍵は、私の師である故アンドレア・ブランジが巧みに描き出した弱い近代性という概念にある。

それは、建築やデザイン、テクノロジーが風景や地域の歴史に一方的に押し付けられるのではなく、お互いが溶け合う関係性だ。自然と人間が長い時間をかけて形づくってきたエコシステム特有のリズム、不完全さ、そして有機的な複雑さを受け入れる。過去をきれいに消し去るのではなく、それを取り込み、再解釈し、想像力をもって優しく撫でることで、豊かで継続的な対話を生み出す。これこそが、もうひとつの近代の姿なのだ。

##### 2 地層のような多層性—苦難から卓越へ

この地域の多層性、つまり経験と知恵が積み重なった地質学的な層を探索することは、まるで何世代にもわたる生命の営みを辿る考古学的調



査のようだ。それぞれの層は常に他の層と絡み合っているが、同時に、古代の木の年輪を眺めるように、私たちに新たな発見や気づきを与えてくれる。

それは、過去の物語で語られるような、経済的なものだけでなく実存的な苦難を伴った農民の貧しさが、いかにして今日の生産的な卓越性へと変化したのかを理解する手がかりとなる。

この卓越性は、単に進んだ技術や機械のおかげではない。何世紀にもわたって試行錯誤を繰り返し、まるでワインを醸造するかのように磨き上げられてきた結果である。遠い昔から受け継がれてきたノウハウ(saper fare)の賜物なのだ。

画期的な発明による破壊的な技術革新とは違う。これは、プロセスと意味の絶え間ないイノベーションだ。人間と環境、そして仕事の成果との関係を常に新しい視点から問い直し、苦難を価値へと変えてきた。その根底には、持続可能な解決策でなければならないという揺るぎない信念がある。

さらに、このイノベーションの時間軸は、近代性の典型である直線的な思考とは異なる。それは自然に内在する循環性に属している。農業は常にこの循環性と向き合ってきた。全ての成果は、満たされ、更新され、革新されるという循環的なプロセスの中で「待つ」ことによって得られるものだ、という深い認識がある。

### 3 自然と共鳴するイノベーション—アンドレア・ブランジの「アグロニカ」

近年、私たちは短いサイクルと破壊的な変化を伴うイノベーションという考えに慣れ親しんできた。シリコンバレーや上海は、私たちの時間感覚を加速させ、次なる大きな成功を求める狂騒的な競争へと駆り立てる。

しかし、ランゲには別の物語がある。イノベーションは瞬間的に燃え上がる短距離走ではなく、自然の営みと密接に結びついたサイクルであるという物語だ。これは、進歩を拒絶するものではない。懐古的な田舎の風景にありがちな停滞を未来と対立させるものでもない。ある特定の成果を達成するために必要な、異なる時間への深い理解を示しているの

だ。ブドウが実るまでには長い時間が必要であり、ヘーゼルナッツが一日で熟すわけではない。それは誰もが知っていることだ。

デジタルアプリケーションも一夜にして生まれるわけではない。どちらも、細心の注意、ほとんど修道僧のような忍耐力、天候（またはアプリケーションの場合は外部のタイミング）、土壌（ソフトウェア）のニュアンス、そして植物（あるいはコンピュータウイルス）を襲う病気への注意深い観察が必要だ。

この地域のイノベーションは、そうした有機的な論理を基盤としている。それはトップダウンで押し付けられたり、現実からかけ離れたクリーンルームのような研究所で生み出されたりするものではない。何世代にもわたって培われた実践、そして持続可能で、長持ちし、地域に調和する解決策で具体的な課題に応える必要性から、現実そのものから生まれてくる。

あらためて言おう。アンドレア・ブランジの弱い近代性という思想は、このイノベーションの理解に不可欠だ。彼によれば、イノベーションは20世紀初頭の産業近代化を特徴づけたような、筋肉質で全体主義的な力とは異なる形で現れることがある。この視点に立てば、デザインは人間と自然のスケールに自らを合わせ、環境とそのニーズとの深い共鳴を求めることができる。このイノベーションの最終目標は、効率や最大利益ではなく、生活の質の広範な向上なのだ。

### 4 生きた実験場としてのランゲ

ブランジがドムスアカデミー研究センターとフィリップスデザインセンターのために立ち上げた「アグロニカ」プロジェクトは、農業と新しいテクノロジーを融合させるという、先見性のある試みだった。これは、持続可能性を考慮しない生産増強のためでも、盲目的で野蛮な工業化のためでもない。地球そのものが自らの複雑さを意識しているかのよう、知的で、回復力があり、自己組織化するエコシステムを創造することを目的としていた。

何世紀にもわたる農業の伝統と多様な産業的・文化的卓越性を統合しようとする力に気づくと、ランゲは「アグロニカ」の自然な実験場であるように見えてくる。ここでのイノベーションは、時間と資源を尊重し



ながら、自然のサイクルに接ぎ木されている。それは、鳥のさえずりやミツバチの羽音をかき消すような騒がしいテクノロジーの祭典ではない。むしろ、風景を優しくなでるように、根底からひっくり返すことなく革新していく、大きく羽ばたいた知性の一形態といえるだろう。

このようなイノベーションが広がる実験場において、デザインは、単なる華やかなスタジオやアートギャラリーに閉じ込められたニッチな分野ではない。デザインは、遍在する文化的な姿勢として形をとる。ランゲの企業がデザインと結びつく特別な関係は、まさにこの感性に基づいている。これらの企業は、農業地域に突然現れた異物ではなく、その土地から生まれ、育まれてきた。彼らは地域の時間と資源に合わせて自らを形作り、土地のリズムと人々のニーズに耳を傾けることができる工業化のあり方を体現してきたのだ。

## 5 未完の近代性—未来への貴重な視点

これまで述べてきた内容は、ブランジが描いた弱い近代性に非常に近い。大企業は小規模なスケールや職人の世界を消し去るのではなく、それらと統合し、その柔軟性や細部への配慮から生まれる、静かに物事を変える力を利用する。これは産業の枠を超えている。行動、生活、そしてデザインに対する包括的なアプローチに根ざし、ユニークな価値を生み出すことができる。

進歩は到達点ではない。古いものと新しいもの、人工的なものと有機的なものが共存する、絶え間ない適応の旅である。それは、深い本質を失うことなく、新しいものを呼吸し、吸収し、再加工することを可能にする活力なのだ。

環境危機や社会の分断が深刻化し、技術的な解決策を狂奔的に探し求める現代において、ゆっくりと根付き、相乗効果を生み出すこのイノベーションのモデルは、貴重な視点を提供してくれる。何としても成長を追い求めるのではなく、コミュニティと環境全体のウェルビーイングを追求する。ランゲは美食や産業の成功を収めた地域であるだけでなく、イノベーションのありうる未来を示してくれる、生きた実験場なのだ。

ランゲは、その物語に耳を傾ける人々に、静かに、しかし揺るぎない

決意で教訓を与え続けている。最も興味深い未来は、どのように、そして何を本当に探すべきかを知っている人へののみ明らかになる。これは、自分自身の本質を否定することなく進化する能力であり、バランスの取れた、より人間的な開発モデルを求めている世界にとって極めて貴重な教訓だ。

(安西洋之訳)

## 【参考文献】

- Abet Laminati HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://abetlaminati.com/>
- Alessi HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). [https://alessi.com/it?tw\\_source=google&tw\\_adid=650693987017&tw\\_campaign=906559084&tw\\_source=google&utm\\_source=google&utm\\_medium=cpc&utm\\_campaign=&utm\\_id=%22%20+%20campaign.getId\(\);&gad\\_source=1&gad\\_campaignid=906559084&gbraid=0AAAAADIgYkIZCbyK2ZmnIDTdYCLd23ISj&gclid=CjwKCAjwhuHEBhBHEiwAZrvdcK431-o7i47iioE4nOrTtZF1mYKNRBr10cMdCD3tUnCsmKi8UwN3lhoCKGEQAvD\\_BwE](https://alessi.com/it?tw_source=google&tw_adid=650693987017&tw_campaign=906559084&tw_source=google&utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_campaign=&utm_id=%22%20+%20campaign.getId();&gad_source=1&gad_campaignid=906559084&gbraid=0AAAAADIgYkIZCbyK2ZmnIDTdYCLd23ISj&gclid=CjwKCAjwhuHEBhBHEiwAZrvdcK431-o7i47iioE4nOrTtZF1mYKNRBr10cMdCD3tUnCsmKi8UwN3lhoCKGEQAvD_BwE)
- 安西洋之(2020)『メイド・イン・イタリアはなぜ強いのか』晶文社。
- 安西洋之・中野香織(2022)『新・ラグジュアリー：文化が生み出す経済 10の講義』クロスメディア・パブリッシング。
- Arpa Industriale HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.arpaindustriale.com/it-IT/fenix>
- Banca del Vino HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.bancadelvino.it/>
- Big Bench Community Project HP. (n.a.) (2025年8月9日閲覧). <https://bigbenchcommunityproject.org/>
- Branzi, Andrea. (2014) *Ritratti e autoritratti di design*, Fondazione Cologni Marsilio.
- Chris Bangle Associates HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.chrisbangleassociates.com/>
- Confindustria Cuneo. (2020) Alba capitale della cultura d'impresa Cuneo. Dossier Candidatura.
- Demaria, Valerio. (2000) *Valerio Demaria : Architetture 1967-2000*, Skira.
- DIF421 HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.dig421.org/>
- Ferrero HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.ferrero.com/it/it/chi-siamo/una-storia-di-famiglia>
- Fiera del Tartufo HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.fieradeltartufo.org/>
- Fondazione Ferrero HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.fondazioneferrero.it/>
- Fondazione Sandretto Re Rebaudengo HP. (n.a.) (2025年8月11日閲覧). <https://www.parcoarte.fsrr.org/>
- Fondazione Slow Food per la Biodiversita Onlus HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.fondazioneSlowfood.com/it/>
- Gruppo Mondo HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://www.mondoworldwide.com/emea/it/mondo-group/>
- Italian Radical Design Group HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://italianradicaldesign.com/>
- L'astemia Pentita HP. (n.a.) (2025年8月10日閲覧). <https://astemia.it/> <https://www.confindustriacuneo.it/servizio/direzione/notizia/38841/comunicato-stampa-ad-alba-si-chiude-un-anno/>
- Le Langhe Terre di sogno HP. (n.a.) (2025年8月11日閲覧). <https://www.visitlrm.it/it/territorio/langhe>

he

Lindt & Sprüngli HP. Integration of Caffarel (2021 年 9 月 24 日), (2025 年 8 月 11 日閲覧). <https://www.lindt-spruengli.com/press-releases-and-news/lindt-spruengli-group-announces-integration-of-caffarel-spa-into-lindt-spruengli-spa/>

Manzini, Ezio. (2015) *Design, When Everybody Designs*, The MIT Press.

Manzini, Ezio. (2019) *Politics of the Everybody*, Bloomsbury Publishing. (安西洋之・八重樫文訳 (2020)『日々の政治：ソーシャルイノベーションをもたらすデザイン文化』ビー・エヌ・エヌ新社).

Merlo HP. (n.a.) (2025 年 8 月 10 日閲覧). <https://www.merlo.com/>

Michelin Guide HP. (n.a.) (2025 年 8 月 9 日閲覧). <https://guide.michelin.com/it/it/piemonte/cerretto-langhe/ristoranti?sort=distance>

Salone del Mobile.Milano. (2024 年 11 月 28 日)“(Eco) Sistema Design Milano,” (2025 年 8 月 10 日閲覧). <https://www.salonemilano.it/it/articoli/salone-del-mobilemilano-presenta-eco-sistema-design-milano>

佐藤和子(1995)『「時」に生きるイタリア・デザイン』三田出版.

Sottsass, Ettore. (2010) *Scritto di notte*, Adelphi.

Sottsass, Ettore. (2017) *There is a planet, Triennale Design Museum*, Mondadori Electa.

Stasi, Lorenzo. (2011 年 7 月 24 日)“La storia dell'uomo che costruì la prima Fiat, 125 anni fa (e fu liquidato con 30 mila lire),” *Corriere della Sera*, (2025 年 8 月 13 日閲覧). [https://torino.corriere.it/notizie/cronaca/24\\_luglio\\_11/fiat-storia-ceirano-d4badd3b-882c-42bb-9e31-1a0837e83x1k.shtml](https://torino.corriere.it/notizie/cronaca/24_luglio_11/fiat-storia-ceirano-d4badd3b-882c-42bb-9e31-1a0837e83x1k.shtml)

Tartufi Morra HP. (n.a.)“Giacomo Morra,” (2025 年 8 月 9 日閲覧). [https://www.tartufimorra.com/pages/giacomo-morra?srsId=AfmBOor8aNVj4hvtJ\\_qSLw4m17BqhQObe5v2ebyRYTLA2B-CEReDXm](https://www.tartufimorra.com/pages/giacomo-morra?srsId=AfmBOor8aNVj4hvtJ_qSLw4m17BqhQObe5v2ebyRYTLA2B-CEReDXm)

Tognini, Giacomo. (2025 年 8 月 5 日)「4600 億円で WK ケロッグを買収、伊・菓子大手フェレロを率いるビリオネア経営者の正体」*Forbes JAPAN*, (2025 年 8 月 10 日 閲覧). <https://forbesjapan.com/articles/detail/81000>

Universita di Scienze Gastronomiche di Pollenzo HP. (n.a.) (2025 年 8 月 10 日 閲覧). [https://www.unisg.it/corsi-iscrizioni/laurea-triennale/?utm\\_source=GoogleAds&utm\\_medium=Ricerca&utm\\_campaign=IT](https://www.unisg.it/corsi-iscrizioni/laurea-triennale/?utm_source=GoogleAds&utm_medium=Ricerca&utm_campaign=IT)

Verganti, Roberto. (2009) *Design-Driven Innovation*, Harvard Business School Publishing. (佐藤典司・岩谷昌樹・八重樫文監訳(2016)『デザイン・ドリブン・イノベーション』クロスメディア・パブリッシング).

Verganti, Roberto. (2016) *Overcrowded Designing Meaningful Products in a World Awash with Ideas*, Massachusetts Institute Technology. (八重樫文・安西洋之監訳(2017)『突破するデザイン』日経 BP).

Vidal, Florence. (1990) *Le management à l'Italienne*, InterÉditions. (岡本義行訳(1995)『イタリア式マネジメント』三田出版会).

Venchi HP. (n.a.) (2025 年 8 月 10 日 閲覧). [https://it.venchi.com/our-story?\\_gl=1\\*11wutu\\*\\_up\\*MQ.&gclid=CjwKCAjwhuHEBhBHEjwAZrvcnCKBJRdtfwHF3hicqx01Ni0WI3gcGhYjNU6kdV7zAVMyAnGY0iJphoCkygQAvD\\_BwE&gclid=aw.ds&gclid=0AAAAADoI1a9uc4f9rYKF3egGue\\_zfZN63](https://it.venchi.com/our-story?_gl=1*11wutu*_up*MQ.&gclid=CjwKCAjwhuHEBhBHEjwAZrvcnCKBJRdtfwHF3hicqx01Ni0WI3gcGhYjNU6kdV7zAVMyAnGY0iJphoCkygQAvD_BwE&gclid=aw.ds&gclid=0AAAAADoI1a9uc4f9rYKF3egGue_zfZN63)

吉田圭織(2025 年 7 月 11 日)「チョコ「ヌテラ」の伊社、コーンフレークの米ケロッグ買収 朝食の雄に」『日本経済新聞』, (2025 年 7 月 12 日 閲覧). <https://www.nikkei.com/article/DGX-ZQOGN07C6K0X00C25A7000000/>

(安西洋之)

## 第 2 部

# テリトリーオの 理論と実践の さらなる展開： 風景と食を 焦点として